東日本大震災 復興·支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人:平賀徹夫 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12 カトリック仙台司教区事務局 Tel022-222-7371 Fax022-222-7378

- 1) 義援金振替口座:02260-9-2305 名義:カトリック仙台司教区本部事務局
- 2) 支援金振替口座: 00170-5-95979 名義:カリタスジャパン

新年 おめでとうございます

仙台教区サポートセンター センター長 平賀 徹夫 司教

2020年の新年を、皆さまはどのような所で、どのような思いでお過ごしになっていらっしゃるのだろうかと心に思い浮かべながら、新年のごあいさつを申し上げております。

東日本大震災から、早いもので、今年で丸9年を迎えます。「谷間に置かれた地域やそこに暮らす人たちの心を生き、励まし、つなぎ、支え、寄り添う教会である」ことを目指すという目標のもと、被災直後の一時の救援にとどまらず、発災から9年経とうという今も、多くの方々が支え続けてくださっていることは、被災された方はもちろんのこと、現場で支援活動に取り組んできた方々にとっても大きな励みとなり、力になっています。改めて、この長期にわたるご支援に心から感謝申し上げます。

このように、福島、宮城、岩手、青森の被災 4 県を抱えている仙台教区は、国内外の大勢のボランティアの方々のお力や、物心両面でのご支援により、支えられてまいりました。昨年は、台風 19 号、20 号、21 号と続けて日本各地に大雨・洪水の災害をもたらした大変な 1 年でもありました。ここでも、皆さまのご協力・ご支援によって、再び水害の被害を受けられた東日本大震災の被災者の方々や、被災地の復興活動に力をいただいたことに、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

昨年 11 月に訪日された教皇フランシスコは、教皇としての広い心、牧者としての勇気とやさしさを私たちに感じさせてくださいました。そして何よりも、神の慈しみと愛の希望の心の大切さを私たちに残してくださいました。

教皇様が「三重災害の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心を、あたかも一つであるかのように、一致させなければなりません。こうして、苦しむ被災者は助けを得て、自分たちが、忘れられていないと知るはずです。多くの人が、実際に、確実に、被災者の痛みをともに担っていると、兄弟として、助けるために手を差し伸べ続けると知るでしょう。……このような思いやりが、すべての人が未来に希望と安定と安心を得るための歩むべき道のりとなりますように」と願われたように、この 2020 年が教皇様の願いを実現する年でありますようにと、私も心から願っています。これはまさに、仙台教区が災害発生の最初から打ち出した「新しい創造」計画で歩み続け、私たちが恵みとしていただいた「開かれた教会」の姿を生きることでもあります。

2020年を教皇様からいただいたお言葉を糧として、共に祈りながら「谷間に置かれた人々」とご一緒に、一つの心で、私たちがそれぞれ置かれた場で、神のみ旨を果たしてまいりましょう。今年が、私たちにとって、恵みと希望の年となりますように。

2020年1月1日

ナマルチノ平質旅夫







新しい年の初めにあたり、皆様への感謝と皆様の上に神様の豊かな祝福をお祈りいたしております。

今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今号では、昨年 11 月 25 に行われました「教皇様と東日本大震災被災者との集い」に参加された方々の感想などをお届けします。また、昨年 7 月 15 日に続き、第 2 回目となる「浜通りのシスターの集い」が、1 月 6 日、福島県のカトリック原町教会で開かれました。今回は、「訪日された教皇から与えられた励ましと今後の課題について」というテーマで、幸田和生司教をはじめ 13 人の出席者各自が分かち合いました。その一部をご紹介します。

最後に、「2020年版 東日本大震災 復興支援タオル」のお申込み締め切りが、1月31日(金)までとなっております。ご希望の方は、お早めにお申し込みいただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

教皇フランシスコとの出会い

ケベック外国宣教会 シャール・エメ・ボルデュック神父

2019年9月、仙台教区小野寺洋一神父から電話があった。11月25日、東京半蔵門の会場に300人が呼ばれているという話だった。対象者は、地震・津波・原発事故の遺族や被害を受け、避難を強いられた人々など。私は、ケベック外国宣教会のラシャペル神父が亡くなったので、遺族代表として呼ばれたのだった。ラシャペル神父は、カトリック塩釜教会の主任司祭兼塩釜カトリック幼稚園の園長をしていた。震災発生時は仙台にいたが、幼稚園児や信者が心配で塩釜へ戻る途中、教会近くで心臓発作のため帰天した。私には、亡くなられた被災者の方々と手をつないで、天国へのぼっていったのだと思えた。

多くの人々の希望によって、教皇フランシスコには福島まで来ていただいて、現地の被害をご自身の目で確かめて被災者を励ましていただければ、と願っていたが、厳しいスケジュールの中でそれは難しいと諦めざるを得なかった。

当日、会場であるベルサール半蔵門には、被災者の中から選ばれた人々、カリタスの人々、各ベースで働く人々、8年前からボランティア活動を続けている人々が集まっていた。そこにはオーケストラもあって、国内外の大勢のマスメディアが集まっていた。オリエンテーションが終わり、幸田和生名誉司教の挨拶が始まり、この集いの目的と被災した人々と共に歩んでいくカトリック教会を紹介され、その後、小野寺神父のお祈りがあった。40分間の集いの間、会場はずっと祈りの雰囲気に満ちていた。

震災当時の様子









選ばれた 10人が舞台に上がるように案内され、その中に私もいたが、私にはその資格がないと感じていた。教皇フランシスコが会場に着くまでの何分間を待つ間、私の8年前の複雑な気持ちが蘇ってきていた。まず、大地震のショックそのもの。そしてライフラインが全て止まってしまって何もかもが非常に困難だったこと。ロウソクで過ごしたその夜、元寺小路教会の近くの人々が、教会にロウソクを買いに来たことなど…。

原発事故後、さまざまな噂が広がっていた。早速、各国の大使館からしつこく電話がきて、外国籍の人たちに「自分の国に帰るように」と言ってきた。私は仙台市役所前のバス停にたくさんの外国籍の人が

並んでいるのを見た。バスで山形空港まで行き、そこから関西国際空港を経由して自分たちの国へと飛び立って行くのだった。しつこい電話は国へ帰るようにと言い続けたが、私たちは「日本にいる宣教師は牧者として、今この時こそ困っている人々と一緒にいなければならない」とはっきり断った。「牧者たちは羊飼いたちと一緒にいなければならない」(ヨハネ 10 章 1~15 節)時だった。その時からのカリタスの素晴らしい活動、数多くのボランティア、サポートセンターの活動を思い出していた。

いよいよ教皇様が会場に入って来られた。オーケストラはアルゼンチンのタンゴを演奏し始めた。アルゼンチン人なら誰もが涙する有名な曲だそうで、教皇様はご自分の挨拶の始めにこの演奏への感謝を述べられた。それから壇上の10人一人一人と握手してくださり、私たちは赤い箱に入った教皇の紋章入りのメダイをいただいた。私はごく短い時間、教皇様とスペイン語で言葉を交わした。「私は日本で50年宣教していますが、パパ様は今日の1回のお話で、私の50年分の宣教と同じお働きをなさいましたね」とお伝えした。





その後、証言者として壇上に上がった3人が、2分ずつ体験を話された。始めは、岩手県宮古市の幼稚園の先生。津波の時に子どもたちを救うためにどのような工夫したか、その日から子どもたちに津波の恐ろしさを伝えて続けていること。次は田中徳雲氏。原発から17キロ離れたところにある寺の住職で、檀家はすべて全国に避難して散り散りになってしまったこと、原発事故の被害の状況など。最後は福島県いわき市出身の高校生で、原発事故後、東京に避難したが、いじめを受け横浜に移った後からは福島出身を隠して生活していたこと、友達の支えがあって試練を乗り越え、2019年3月にローマを訪問、教皇様に謁見したことなど。3人の話が終わり、教皇様は3人と握手し、高校生と抱き合った。

教皇様はこれらの話に応えるように、3人の名前を呼びながら、希望のメッセージを伝えてくださった。一言でまとめるならば、現代社会のさまざまな問題は別々に解決することではなくグローバルなアプローチで取り組むことが必要になっている。なぜなら、これらの諸問題は互いに関係があり、無関心ではなく対話の文化が必要になっている。それゆえ、私たちは信者としてキリストのように慈しみの心を持つ大切さを強く教えられた。

メッセージを伝え終わると教皇様は舞台を降り、私たちは全員で「花は咲く」を歌って教皇様を見送った。短い 40 分間、祈りの雰囲気の中に過ごし、胸がいっぱいになった。

最後に「教皇様と東日本大震災被災者の集い」を準備なさったカリタスやカトリック中央協議会の皆さんに心より感謝いたします。



被災者代表として登壇された 10 人

「励まし」と「喜び」の集いに感謝 カトリック松木町教会「愛の支援グループ」 鈴木キミ子

まさか?

「東日本大震災被災者との集い」に招かれることを知ったとき、まさか、あの夢は正夢?三年ほど前だったと思います。教会の被災者支援活動がぶれそうになっていた頃、真っ白い姿のフランシスコ教皇様がほぼ笑みながら夢の中に現れたのです!

教皇様は、福島市の県庁裏の阿武隈川で小さなボートに立っておられ「キミ子さ〜ん(日本語でした)」と何かを私に飛ばされて、私は、両手を広げ「は〜い」と受け取り、開けてみると何と『半ズボ〜ン』? そして、まさか今回『半ゾウモーン』でお会いできるとは思いがけないことでした。招かれる理由も分からないまま、原発事故の被災者として「はい」の一言で集いに参加させていただきました。

日が経つにつれ感動!

前日から、和服にスニーカーで東京に向かいました。当日、ベルサール半蔵門会場へは和服に草履で。さて、フランシスコ教皇様をお迎えする待ち時間の間、静かにヴァイオリン演奏を聴きながら黙想しているうちに、私は、次第に緊張している自分に気づきました。教皇様にお会いできる喜びの緊張とでもいうのでしょうか。ですから、「教皇様に握手していただいた感想は?」と、聞かれてもハッキリ答えられず、ただ、優しい思いを全身に感じたことは確かでした。後日、ユーチューブ映像を何回も見て、日が経つにつれ感動がこみ上げてきました。それは、慈しみといたわりの祈りの集いだったからでしょう。





忘れないで! 原発はいらない!

教皇様は、福島の原発事故を特に思い起こされておりました。あの原発事故から「安全神話」は崩れました。福島市は、福島第一原発より北西に約60㎞離れています(中通り)。放射能の数値はかなり高い所も多くありましたが避難指示はありませんでした。危険を感じて自主避難できた人もいますが、福島市の地で生活している人の方が遥かに多いのです。このたびの被災者との集いに参加した中で、中通り(福島~白河)の被災の現実も忘れないでほしいと思っています。

私たちは、自分たちも放射能による被災者であることから、避難者を他人事とは思えませんでした。カリタスジャパンのご支援をいただきながら、8年9カ月経った今も避難者の方々と関わり(集い、訪問、カリタスからのおたよりの発送)を続けています。その中でさまざまな辛い心情に触れ、原発事故の重さを実感し、支援活動を歩みながら原発問題を考えるようになってきました。この集いで、教皇様が「原発はいらない」というお考えに触れられたことは、私たちに励ましと希望をくださいました。そして、教皇様のメッセージの「一人では復興できません」「私たちの後に生まれる人々に、どのような世界を残したいですか」のお言葉が、心に響いています。

このたびの集いは支援者との集いでもあったようです。支援活動が「神の道具」として関わることができたら「喜び」となることでしょう。私たちはこれからも共に祈りながら心ひとつにして歩み続けようと思います。

フランシスコ教皇様、全ての関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

心の声を聴いて~Listen to your heart~

カトリック大船渡教会 Pagasa 会代表 菅原マリフェ

「東日本大震災被災者との集い」で、幸運にも私は3.11の被災者代表に選ばれました。最初に思いついたことは「何を着るか?」です。カリタス大船渡ベーススタッフの大河内愛さんに相談し、フィリピンの家族へフィリピンの正装でパパ様に会いたいと伝えると、妹がすぐにドレスの準備に取り掛かってくれました。すごい!このドレスを着れば、パパ様にも参加者の皆様にも私がフィリピン人だとわかっていただけます!私の日本の家族もサポートしてくれました。92歳になる義理の母はとても喜び、夫は顔に出しませんでしたが、私より興奮していました。

次に、パパ様へのプレゼントを考え、Pagasa の T シャツにしました。パパ様にどうしても Pagasa は震災後に教会の中で生まれたことを直接伝えたくて、数十秒のスピーチを練習しました。

しかし、直前にプレゼントを渡せないこと、パパ様が先に話し掛けなければ、パパ様に話し掛けるのもダメと連絡があり、とてもガッカリしました。でも、握手は OK です。

当日は、朝早く目覚めました。緊張と、たぶん、パパ様へのプレゼントが心に引っかかっていたからです。私はプレゼントを渡せないけれど、最後の瞬間まで私の心は「Tシャツを持っていくのよ」と自分に言いきかせました。

友人のロサリンダさんと娘のせなちゃんと英菜ちゃんは、大船渡ベースのスタッフさんと一緒に、この日の早朝、東京に到着しました。まだホテルにチェックインできないため、ロサリンダさんたちは、私の部屋に荷物を置き、準備しました。朝食を終え、部屋に戻ると、せなちゃんの大きなバッグが目に留まり、そのバッグに Pagasa のTシャツを入れてもらうことにしました。

集いの間、ステージにいた私たちは、パパ様と2度握手をしました。 パパ様の手はとても温かく、とてもやわらかかったです。パパ様に手 を握られたなら、誰もがとても清くなったと感じるでしょう。

パパ様はステージを降りてから、子どもたちを祝福なさいました。その間、通路にいたせなちゃんが、パパ様が通られた瞬間、パパ様にTシャツを差し出したのです。妹の英菜ちゃんが一部始終をビデオに撮っていました。後でビデオを見ると、Tシャツは側近の方に手渡されました。集い後、せなちゃんが走ってきて、「私、Tシャツを渡したよ!私からパパ様がTシャツを受け取ったところを英菜ちゃんがビデオに撮ったよ」と言いました。ステージ上にいて何も知らなかった私は、うれしさのあまり涙がこぼれました。パパ様と話せませんでしたが、Pagasa について書いた手紙をTシャツに同封していました。

神様は思いがけない方法で導いてくださいました。心の声を聴くことがとても大事です。まさに、これがパパ様来日で私が学んだ 1 番のことです。「心の声を聴くこと」。

パパ様の来日により、私の日本の家族が私の宗教に興味を持ち、パパ様のニュースがあると、家族はパパ様に強く関心を示しました。良いスタートです。

最後になりますが、私を選んでくださったことを感謝いたします。 今回のことは、これからずっと"PAGASA"(希望)になります。



大船渡教会の新たな宝

カリタス大船渡ベース 大河内 愛

2019年12月1日(日)、カトリック大船渡教会でのミサ後、大船渡市で医師をしている山浦玄嗣先生からパパ様にお会いした時の報告がありました。

11月25日に行われた「東日本大震災被災者との集い」の代表に山浦先生が選ばれた時から山浦先生はある計画を練られました。

その計画とは、帽子職人である山浦先生の娘さんにパパ様がいつもかぶっておられる白い帽子(正式には「ズケット」と言うそうですが)を作ってもらい、当日、パパ様にスペイン語で、「これは娘が作ったまがい物の帽子ですが、パパ様がかぶることにより本物になります。これを大船渡教会の宝とし、信者の皆さんの大きな励ましとなるでしょう」といった内容を語る算段でした。

11月中、山浦先生にお会いすると、「スペイン語を一生懸命練習している」とおっしゃいましたし、教会にスペイン語が得意な方がいらした時にスペイン語のチェックをしてもらい、何よりも熱心に取り組まれているのが伝わってきました。

さて、当日、集いのステージ上で山浦先生はパパ様に「これは娘が作ったまがい物の帽子ですが」と言ったところで、なんとパパ様はご自身の帽子を取り、山浦先生の帽子をしばらく被ってくださり手渡してくださったそうです。



山浦先生は、この帽子はまがい物だとしかパパ様には言えませんで したが、パパ様は「お前の考えはよくわかった」という目をなさって いたそうです。

12月1日の報告では、山浦先生はパパ様と帽子のやりとりの写真4枚を貼った両開きの色紙をお持ちでした。写真ごとにコメントが添えてありました。色紙の裏には、山浦先生がパパ様に全部お伝えできなかったスピーチが書かれていました。山浦先生はそのスピーチを流暢なスペイン語で語られました。

次に、山浦先生は4枚の写真を1つ1つ説明になりました。ここで注目すべきは、終始無表情のパパ様のお付きの神父様が、この時ばかりは天を向いて大笑いしたところです。決定的瞬間の写真です。これには皆さん大爆笑でした。

そして、山浦先生はおもむろに桐の箱を出し、丁重に箱のふたを開け、中の物を取り出し、高々と掲げました。それは、台座にぴったりおさまっている帽子でした。もちろん、台座も山浦先生のお手製です。

台座には、パパ様の写真がはめこまれていました。皆さん、一斉に 写真を撮りました。私の隣にいた方が「私は、山浦先生に帽子を振っ たらダメよと言ったの。パパ様の毛がついてるかもしれないから」と





笑っておっしゃいました。パパ様の髪がついていたかは不明です。

さらに、山浦先生はパパ様がくださったメダルと日本カトリック司教団がくださったメダルを見せてくださり、その場にいた全員が手にしました。フィリピン出身の方はそのメダルで頭や腕や体をさすりました。

山浦先生のご報告の間、終始、御聖堂は笑いに包まれ、東京へ行かなかった方々も満面の笑みでした。山浦先生のひらめきは、多くの方々 (パパ様のお付きの神父様も含む)を笑顔になさいました。

もしかすると、これは、後々パパ様がふと思い出し笑いするエピソードかもしれません。







教皇様から被災者代表の登壇者へ贈られたメダル

日本カトリック司教団から贈られたメダル

第2回浜通りのシスターの集い 教皇から与えられた励ましと今後の課題について

第2回浜通りのシスターの集いにおいて分かち合われた内容を一部、 ご紹介します。

- ・福島に帰ってくると、「被災者として、教皇様のお話と祈る姿が、心に残りました」と、ごミサに行かれた後の感動を話してくださる方がいました。その方との距離が、一気に縮まったような感じがして、感動しました。
- ・被災者との集いで、教皇様が3人の証言者の言葉を交えて答えておられるスピーチを聞き、教皇様の優しさと関わり方がすごいと感じました。
- ・教皇様の「無関心の文化が、いちばん悪い影響を及ぼすもの」、「たくさんの人が犠牲になりましたが、皆が一つになって前に向かって進めるように、勇気を持つように、祈りましょう」との言葉に、いちばん心をひかれました。現代は消費社会と言われますが、無関心であることが、次第に無感覚になっていっていると私は感じています。
- ・今、世界は自国第一主義の風潮があるなかで、そのような各国のリーダーたちが言わないことを教皇は指摘なさっています。それが、私には非常に印象的でした。
- ・教皇が、教会は「野戦病院」にならなければならない、とおっしゃった言葉が印象的でした。野戦病院は、敵、味方の区別なく受け入れます。原町教会、カリタス南相馬の存在、今やっていることを見ると、そのような状態だと思います。今、必要性があるところに、救いの手を差し伸べています。ですから、真剣に祈らなければならないと感じています。
- ・教皇様が「野戦病院」とおっしゃり、イエスのミッションにつながっていくために、誰の声に耳を傾けているのか、どのようにしたら、本当に関われるのかを痛みとして受け止めています。

最後に幸田司教は、教皇が日本の司教団に話された講話を紹介され、 次のように、締めくくられました。

「日本の教会は、殉教者の土台の上に建てられた教会です。日本の教会は潜伏信者の土台の上に建てられた教会です。殉教者の教会は、何でも率直に話すことができます。とくに、この世界の平和と正義という緊急課題に取り組む際はなおさらです」と教皇は話してくださいました。

災害は人を差別しません。原爆の被災者や2011年の「三重の災害」 のことを考えれば、声を上げていく覚悟が必要です。教皇の核廃絶に 同調していきたいと思います。声を上げていく使命、言うべきことは 言う使命、臆することなく声を上げていくことができますように。

「野戦病院」として皆を癒やす。丸ごと受け入れる。傷の癒やしと、 和解と赦しを差し出すことができますように。